

本研究は、現代韓国刺繍作家である李張鳳（イ・ジャンボン）の形成過程に関する考察の一環を成すものである。すなわち、1936年に朝鮮から女子美術専門学校（現、女子美術大学）師範科に刺繍を学びにきた女性の留学時代にかかわる研究であるが、このたびの発表においては、李張鳳へのインタビューを踏まえつつ、刺繍を学ぶための日本留学の社会的、制度的な背景に注目する。

私立女子美術学校（1929—1949年は女子美術専門学校）は、1900年の設立から戦後まで、日本の女学校において、最も多くの朝鮮女子留学生を受け入れた学校であるが、そのうち70%が刺繍専攻者であり、総数は130人に達した。李張鳳は、その76番目にあたる。

李が進学先として女子美術専門学校（以下、「女子美」と略す）を選んだ理由としては、第一に、女子美の刺繍教育が朝鮮で高く評価されていたことが挙げられる。その背景には、日本の影響下に置かれるまでの朝鮮では、刺繍が、あくまでも女性の教養に留められており、一つの教育科目として捉えられていなかったこと、それから、1925年に梨花学堂（現、梨花女子大学校）が高等教育機関になるまで、朝鮮に女子の高等教育機関が存在しなかったという事情が控えていた。

1915年に、女子美の造花科・刺繍科高等師範科卒業生に「手芸科中等教員無試験検定資格」が与えられたことも、李張鳳が女子美を留学先に選んだ理由であったにちがいない。教師という社会的ステータスが高く、高収入が見込まれる職業への道が開かれたことは、李張鳳のみならず、朝鮮の女子たちが女子美を留学先とした重要な動機となったと考えられるのである。

西欧における近代化の進展のなかで「刺繍」は、中産階級の女性たちのステイタスシンボルの一つとなっていく、やがて女子教育に導入されることになる。日本においても、1872年、英国人によって設立された最初の高等女学校「新英学校及女紅場」において、女性の手仕事を意味する「女紅」が教授されるようになったとき、そこに刺繍が含まれることになった。刺繍が「手芸」科目として正式に学校教育のカリキュラムに組み込まれるのは、1901年「高等女学校令施行規則」施行以降のことである。

女子美の刺繍教育の中心的な存在であった松岡フユ（1916—1963年在職）は、教育過程の編成に関する研究を重ね、オリジナリティを重視しつつ、女子美刺繍教育の基礎を固めていった。ただし、それは技術教育に留まるものではなかった。師範科においては、2年から3年にかけて「手芸教授法」が教授され、教育者の育成が図られたのである。その課程は、当時のテキストと考えられる『刺繍理論』に見て取ることができるのだが、そこには、「勤勉」「労作」「忍耐」など修身教育において提唱された諸徳が、当時の労働状況とのかかわりにおいて示されている。

教育者としての手芸家の育成は、手芸教育という基盤のなかで、刺繍の様々な可能性を開くことになった。女子の職業として重視されたばかりではない。刺繍が、編物、造花と共に手芸の一種として教育されたことは、刺繍の普及や存続に大きな意義をもった。韓国についても同じことが指摘できる。女子美への留学生が母国の女子教育機関で手芸科目において刺繍を教えることになるからであり、このことは韓国における東アジア的伝統刺繍の存続にも寄与するところがあった。韓国重要無形文化財第80号の韓尚洙（ハン・サンス）を育てたのが女子美出身の趙貞鎬（ジョ・ジョンホ）であったことに示されるように、女子美の刺繍教育は韓国の伝統刺繍の存続に一役買ったのだ。

女子美の刺繍教育が切り拓いた以上のような可能性の開花のなかに李張鳳が立っているのである。